

麥移植栽培に對する一考察

松 川 正 行

鹿兒島縣立農事試驗場

増收栽培としての移植麥は、その生育過程に於て移植と言ふ栽培操作を必然的に受けるが、その爲に起る種々の栽培条件と、それによる剪根とが生育或ひは収量に及ぼす影響が如何なるかを知る爲に、昭和22年度に於て次の様な試験を行つた。

畦 巾 3尺6寸。
栽植密度 株間5寸，4條，條間5寸。
1株本數 1本，反當24,000株。
品 種 白麥8號。
播種期 11月10日。
處理期 12月15日。
區 別

- I. 間 引 區 本圃を苗床とし坪5勺播として苗を仕立て、5寸×5寸の密度のものを残して他を全部間引いて捨つ。
- II. 剪 根 區 Iの間引區と同様に苗を仕立てるが一度苗を全部拔取り、その場に5寸×5寸の密度に植へる。
- III. 移 植 區 別に苗床を設けて坪5勺播とし、前2者の處理と同時に同じ密度に移植する。

IV. 同期直播區 前3者と同じ播種期に本圃に直播する。

V. 標準直播區 當地方の標準播種期である11月25日に直播する。

結果：I區とII區より明らかに剪根の害が見られる。草丈は常に低く下廻り基数も遅れて増加を示すが、特に初期生育が長期間非常に抑へられ、當時の悪条件の場合の災害がうかがわれる。田穂・成熟は共に遅れた。收穫物にしても別表の如く穂の内容は悪く、子實反當重量も非常に劣る。

次に移植栽培の場合優位な条件にあると思はれる點は、土壤的、肥料的に新しい本圃に移されると言ふ事である。この場合同じ剪根されるにしても、II區と如何様に變つた生育をするかと見ると、草丈は大體同じ傾向で上昇するが稍上廻つてゐる。莖數は同様初期生育は抑へられてゐるが、回復は目覺ましく上昇のカーブが急である。最高分蘗期は早く有効莖歩合は劣るが、穂數は非常に多くなつてゐる。田穂・成熟は變りなかつた。收穫物に於ては別表の如く穂の内容としては左程優るとも思はれないが、穂數の多くなる事によつて子實反當重量としては40%以上の増を示してゐる。

| 項 目 | | I | II | III | IV | V |
|------------------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 一 穂 當 り | 小 穂 數 | 24.40 | 20.40 | 21.00 | 24.70 | 22.90 |
| | 稔實小穂數 | 21.90 | 18.90 | 19.50 | 22.80 | 21.00 |
| | 粒重 (g) | 1.71 | 1.51 | 1.51 | 1.87 | 1.62 |
| | 粒 數 | 60.90 | 52.70 | 54.30 | 62.20 | 56.90 |
| | 穗重 (g) | 2.01 | 2.16 | 2.07 | 2.30 | 2.00 |
| | 穗長 (寸) | 1.65 | 1.65 | 1.56 | 1.67 | 1.48 |
| 1 株 穂 數 | | 6.90 | 6.90 | 9.90 | 8.30 | 8.00 |

しかしながら初めから本圃に直播したIV區と比べて見ると、矢張り剪根の影響が明らかに出て来る。即ち草丈は常に低く下廻り莖數も初期に抑へられた。しかし最高分蘗が多い爲に有効莖歩合は餘り變りないが、穂數は多い。出穂・成熟は遅れる。穂の内容も悪く、唯穂數の多い事によつて子實反當重量としては同程度

位までには近づく。

以上を綜合して考へると、根を切る事の影響は負の方向に働き殊に初期生育に於て長期間抑へられてゐる。移植法により所謂新らしい本圃よりの再出發と云ふ好條件を與へられても、その影響は少くはなるが良い結果とはならない。即ち始めから5寸×5寸の如く疎植して少々早目に直播する事の方が何れの場合よりも結果がよい。がしかし實際栽培に當つては、疎植・早播の直播と云ふ事は欠株・雜草等々非常に障害が多くなるので結局方法として移植、即ち苗床で周到な手入れをして苗を仕立て再出發をさせると云ふ栽培法が有意義になつて来るのではないかと思はれる。

22年度は初期生育の期間が低温乾燥でIV區の同期直播は他の區よりも稍々有利であつたと云ふ事は一應考慮に入れる必要があると思はれる。